

恋の翼

sakurairo

咲良色



恋の翼

江蘇^{sakurain}工業學院圖書館
藏書章

こい つばさ
恋の翼

2009年9月28日 第1刷発行

著者 さくらいろ
咲良色

発行者 新田光敏

発行所 ソフトバンク クリエイティブ株式会社
〒107-0052 東京都港区赤坂4-13-13
電話 03(5549)1201(営業部)

印刷・製本 中央精版印刷株式会社

カバー・
本文デザイン 藤田知子

カバーイラスト 国分チエミ

本文組版 アーティザンカンパニー株式会社

© Sakurairo 2009 Printed in Japan

定価は、カバーに記載されております。

落丁本、乱丁本は、小社営業部にてお取り替えいたします。

本書に関するご質問等は、小社文芸書籍編集部まで書面にてお願いいたします。

ISBN978-4-7973-5421-8



「恋の翼」目次

序 章

5

息苦しい日常

7

運命の出逢い

20

動きだす心

38

偽善の唇

60

走りだす気持ち

68

変化する明日

85

消えない過去

101

約束への期待

113

打ち抜く衝撃

124

絶望の涙

144

狂気の願い

164

捨てる決意

192

与えられた希望

216

歩きだす未来

235

羽ばたく力

243

あとがき

258

序章

「——～～ッ!!」

ガシャーン!

女のヒステリックな金切り声かなきごえと同時に、何かの割れる音わが響くひび。電気もついていない、暗くて蒸し暑い階段あつかいだんに1人腰掛けながら、私はそれを聞く。
こしか

今の音はお皿さらだろうか。

冷静れいせいに、階下にある明かりのついた部屋へやの中の様子すいを推理する。

ほんの数時間前までは、クーラーの効きいているその部屋の中で家族3人、快適かいてきに過すぎていた。

特別会話が弾はずむわけではなかったが、父はビールを飲のみ、母は夕飯ゆうはんの片づけをし、私はテレビを見ながらケータイを適当てきとうにいじっていた。

夕飯の時間に皆が揃みなそろうのは久しぶりで、どちらかといえ
ばこの上なく平和な日常ふうけいの風景だった。

しかし、突然とつぜんの「ピンポーン」という、何となく反射はんしゃてき的

しんぞう
に心臓をドキッとさせる音によって、その平和は崩され
くず
た。

チラッと玄関を見下ろせば、ド真ん中に我が家には違和
げんかん
感のある、ヒールの高い黒い靴。その横には、少し汚れが
かん
あるものの、歩きやすそうなスニーカー。

しゅみ
趣味も性格も生活もまったく異なるような2人の女の
こと
靴。

その2人は今、としがい
年甲斐もなく大騒ぎしながら1人の男の
さわ
ために争っている。
あらそ

とし
「あの年齢で女2人に取り合いされるなんて、うちのパパ
けっこう
も結構やるねえー」

わざとダルそうにため息をつく。

こんなベタな昼ドラのような修羅場に自分が遭遇するな
しゅらば
んて、思いもしなかった。
そうぐう

しゅえん
しかも、主演は実の両親。

と、

その愛人。

笑ってしまう。

✧ 息苦しい日常 ✧

今日も、^{たいくつ}退屈で何も期待できないような一日が始まる。

いつもの時間になり、ケータイのアラームが鳴り始めた。好きな曲を設定したのに、アラームにして毎朝起こされると、なんだか好きの^{ていど}程度が低くなる気がする。

そんなことを寝^ね起^おきの頭で考えながらベッドから起き上がると、朝の光がカーテンの隙間から漏れてきて目を細める。

夏が来た。毎日^{ひ ざ}日差しは強くなり、最高気温を^{こうしん}更新していく。

半袖^{そで}ブラウスと膝上^{ひざうえ}に上げたスカートを着込めば、制服^{せいふく}
^{すがた}姿の私の完成。

気温や天気は変化しても、私は昨日と何も変わりが無い。

身^み支^じ度^{たく}を整^{ととの}えてようやくリビングに顔を出す。

1年前までであった、目玉^や焼きを焼くジュウジュウという音や、コーヒーマ^{にお}の匂い、トーストの焦^こげた匂いなどは無い。

ただ無機質^{む きしつ}に朝^{あさ}を迎えた部屋がそこにある。

私はいつもの通り^{とお}に食パンを取り出すと、そのままジャムを塗^ぬる。焼くのが面倒^{めんどろ}くさいし、早く家を出たいから、簡単^{かんたん}に済ませたいのだ。

ポットのお湯^{お湯}を確認したところでスリッパの音が聞こえてきた。

「おはよう、美桜^{み お}」

「おはよう、ママ」

化粧^{けいしょう}つけはないものの、パジャマから着替^{き が}えて髪^{かみ}を整えた母が入ってくる。

「ごめんね。今日も朝ごはん作れなかったわ。お弁当も……」

「いいよ。朝は食欲^{しょくよく}ないし、昼は買うから心配しないで」
インスタントのコーヒーにお湯^{お湯}を注ぎ、パンを食べながら答える。

母に朝食の用意なんて、かなり前から期待などしていない。たまに調子^{ちょうし}が良くて、してくれるときもあるが、それは貴重^{きちよう}なことになってしまった。

「はい、コーヒー」

母の席^{せき}にカップを置く。

そこに腰掛けると、ため息なのか熱^{あつ}を冷ますためのなのか、息を一つ吐き出す。

それを見て、小さくなったな、と思う。

親の姿を見てそんな風に感じるなんて、お互^{たが}いにもっと

ねんれい かさ
年齢を重ねてからだと思っていた。しかし、17歳の私が
すでにそう思うのだからよっぽどだ。母はそれくらいに弱
く見えるし、目を離してはいけなく思う。

そう、支えがなければいけない。私と父で。

「おはよう」

すでにスーツもネクタイもちゃんとして会社に向かう
準備ができた父が、挨拶をしながらリビングのドアを開
ける。

「おはよう、パパ。はい、コーヒー」

「ありがとう、美桜」

父はいつも通り、母の正面の席に座る。すると、母はカ
ップを持ちながらスッと席を立ち、リビングのソファに移
動する。それを何も言わずに見送る。

前はコーヒーとトースト、目玉焼きとサラダとフルー
ツ。朝から健康的な食事をしていた父だったが、今はコー
ヒー1杯で済ませている。

ていつあつ
低血圧で寝起きの悪い私は、無理をしてまで朝食を作る
気にはなれなかった。

「美桜、今日はパパ帰りが少し遅くなるかもしれないん
だ。といっても電車を2、3本ズラすだけだから」

「わかった」

モグモグと口を動かしながら答える。

「じゃ、そろそろ、いってきます」

父が時計を見ながら立ち上がり、私も、いってらっしゃ

い、と言いかけたときだった。

母の声で2人の動きが止まる。

「どうして私には言ってくれないの？」

ああ、やってしまったな。と、^{しゅんじ}瞬間に悟る。それはきつと父も同じだ。

今日はそっちの気分の日だったのか。席を立つから、^{かま}構ってほしくない日だと思ったのに。

^{まちが}間違いに気づくが、私も時間がない。これくらいなら父1人でも乗り切れるだろう。

パンを一気にコーヒーで流し込んで、^{しょつ}食器を流しに運ぶ。

「違うよ。今のはママも聞いてると思って」

「嘘よ。^{うそ}美桜にだけ言ったわ。いってきますの挨拶も、どうして私にはしてくれないの。私が見えないの？」

「そんなことないよ。今ちゃんと言おうとしたんだ。見えないなんて、そんなことあるわけないだろ？」

父は母の横に腰掛けると、^{やさ}優しく^{せなか}背中をさすった。だんだんと落ち着いていくのがわかった。

最近はずいぶんと安定している。前ならこのまま^{ばくはつ}爆発していたのに。

「……いってきます」

^へ下手に自分が^{かいにゅう}介入するより、今は父に^{まか}任せておいたほ

うが^{はんだん}いいと判断して家を出る。一応挨拶をしてみた。

「今日はなるべく早く帰るから」

「ええ……」

“いってらっしゃい”の返事はない。

リビングの^{とびら}扉を開けてソッと出ていく。閉める直前に
2人を見たが、こちらを向きはしなかった。

「いってきます」

もう一度、届^{とど}かない程度^{せいろう}の声量で言う。試みる。

手を離すとボタン、とドアが勝手に閉まる。

見えていないのは私のほうだ、と思った。

1年前と変わらない家族3人の風景。

変わったのは、そこに流れる空気。

どこか余所余所^{よそよそ}しくて遠慮^{えんりょ}がちで、緊張感^{きんちやう}を含み、歪^{ゆが}
んでいる。

見せかけの平和を^{よそお}装って、私たちは家族を続けている。

ちょうど1年前の夏の始まり、あの争いに^{しょうり}勝利したのは母だった。

だけど、何をもって勝利というのか、それはいまだにわからない。

13

「おはよー、美桜ー！ 聞いてー」

教室きょうしつに着くと席に座るよりも前に、友達ともだちの麻耶まやに話しかけられる。

麻耶はクラスでも派手目はでめの女の子だ。明るい性格でイヤやつ奴やつなのだが、先生に一発いっぱつで注意、指導しどうされるような髪型やメイクをしてくる。

背中にかかるほど長く伸びたストレートの黒髪のを垂たらしたままで、化粧うすは薄くする程度の私は、いつも「もっとちゃんとすればいいのに」とダメ出しを受ける。

“ちゃんと”の意味が先生とはだいぶん違うけれど。

「なにー？ なんかあった？」

私はさして興味きょうみがなさげに聞き返す。だけど、そんなことお構いなしに麻耶は自分の言いたいことを言う。

「昨日の夜さ、私にメールとか電話した？ たぶん繋がつならなかったと思うんだけど」

「えっと、昨日はしてないよ。なんで？ 落としたの？」

「違うのー！ 親に取り上げられたの！」

怒り顔いか おお うったで訴える。

「へー、そりゃまた、災難さいなんな……」

「災難レベルじゃないよ！ ケータイないとか、マジ死にそう！ 私の人生くる狂うよー。あーマジ最悪あの親！」

「……なんでそんなことになったの？」

興奮こうふんする麻耶になぜか冷めてくる。

こんなとき、同級生の友達なら間違いなく同意して同情

するところなのだろう。だけどそれができない。

「通話料金が約束よりかなりオーバーしてて、しかも最近夜遊びが過ぎるって怒られて、喧嘩して……やられた」

明らかな自業自得。

でも、話していくほどに落ち込んでいく彼女にそうは言えなかった。

「災難だね」

「だからそういう話じゃなくてね……」

私のどこかズレたような感想に脱力する。

でも確かに、ケータイのない不安感はわかるので、やっぱり少し可哀相だ。

だけど、本人は特に反省してないみたいなので、この罰は効果ないな、と思った。

「あ、朱音来た！　ねえねえ、聞いてー!!」

教室の入り口にもう1人の友達を見つけると、麻耶は走っていく。きっと同じ話を繰り返すのだろう。

しばらくすると、

「えー！　マジ!?　ありえない！　ヒドイね！」

朱音の口から、私からは得られなかった共感をやっともらい、麻耶は満足げに盛り上がる。

朱音も何かあったのだろうか。同じように親の悪口を言い始めた。

そんな2人を遠くから眺め、ため息が無意識に一つこぼれる。

荷物^{にもつ}を机^{つくえ}の中やロッカーにしまい、やることもなくなったのでポケットからケータイを取り出す。

別にこれといって見るものもないのだが、ヒマになるとこうしてしまう。隣^{となり}の席^むの男子^{ひょうじょう}も無表情^{むひょうじょう}で画面に集中している。これは現代人^{げんだいじん}のクセ^{くせ}というか、病^{びょう}気^きかもしれない。

しかし、そんな姿^{すがた}をわざと恨^{うら}めしようにジーっと見つめてくる視線^{しせん}に気づく。麻耶^{まや}だ。

何となく、ヤバイ。と直感^{ちくかん}して急いで隠^{かく}す。

すると案^{あん}の定^{じょう}、近く^よに寄^よって泣^なきついてきた。

「い〜な〜。私も早く取り返したいよ〜」

床^{ゆか}に膝^{ひざ}をつき、机^{つく}に突^つ伏^ふす。狭^{せま}い机^きの面積^{めんせき}が余計^{よけい}に小さくなる。

なんとも言えずにいと、そんな答えなど待っていないかったのか、麻耶^{まや}は顔を上げていきなり話題を変えてきた。

「ねえ、今朱音^{さそ}も誘^{さそ}ったんだけど、美桜^{みお}も一緒にライブハウス行かない？」

「ライブ？」

「知り合った男^{おとこ}がバンドやってて、今度イベントに出るんだってさ」

すかさず横^{よこ}の朱音^{さそ}が、足りなかった説明^{しゅうめい}を追加^{ついか}する。

朱音^{さそ}はどちらかというと頭^{あたま}が良くて女らしい。長い髪^{かみ}を毎日丁寧^{ていねい}にアレンジしてくるのには感心^{かんしん}する。

一見おとなしそうに見えるが、突^つ走^{はし}る麻耶^{まや}を操縦^{そうじゅう}、フォローしているのは彼女^{かのじょ}だ。